

中国語の配偶者の呼称に関する一考察

— 日本語との対照研究 —

任 利

配偶者の呼称は言語や社会的背景や文化・習慣によって異なる。また、時代や社会の変化に応じて変化していく。

日本では、配偶者の呼称がよく「ことばとジェンダー」の問題としてクローズアップされてきた。特に、「主人」や「家内」という呼称はよく取り上げられている。文化庁（1999）の世論調査では配偶者の呼称（女性の場合）「主人」が最も多く74.6%で（p.55）、配偶者の呼称（男性の場合）「家内」が最も多く51.1%である（p.52）。最近の水本（2017）の調査では、配偶者の呼称（女性の場合）「主人」が33.0%で、配偶者の呼称（男性の場合）「家内」が20.5%である（pp.17-19）。文化庁（1999）の調査と比べ、使用率が半減したが、これらの呼称はまだ存続している。日本語の「主人」や「家内」ということばの本来の意味を考えると、性による差別語といえる。しかし、現代の日本では習慣的に使っているのが現状である。また、配偶者の呼称の問題としてよく注目されてきたのは、「日本では夫婦がお互いをパパ、ママあるいはお父さん、お母さんのように呼び合うことが多い。」（鈴木 1973：189）「子ども中心的用法」（金 2002：270）という日本の独特な言語習慣である。

一方、中国語の配偶者の呼称はまた日本語と違う側面が見られる。古代および近代の中国では、社会階級が存在し、“男尊女卑”の性差別意識が根強く存在していたため、配偶者の呼称にも強く反映していた。“男女平等”が唱えられ続けてきた現代の中国では、社会の変化とともに夫婦呼称の変化も観察された。1949年新中国成立後、1950年代以降“爱人”という配偶者の呼称が全国的に特に都市部ではよく普及し、定着した。“爷们”[亭主]、“媳妇儿”[嫁]を使用する人が減少した（賈 1999：293）。中国語の“爱人”は夫婦の一方を

さすことばである。男性と女性の区別がなく、自分の夫や妻を“爱人”と呼ぶ。また、社会の変化とともに、“男人”“女人”“当家的”[旦那]“先生”“太太”という配偶者の呼称は使用範囲が狭くなり、徐々に淘汰されるようになった(賈1999:317-318)。しかし、中国の改革開放後、“爱人”の使用が時代の制約で衰退する傾向がある。90年代後半から、高学歴階層が“先生”“夫人”“太太”を多く使い、低学歴階層が“孩子他爸”“孩子他妈”“老公”“老婆子”をよく使用していると指摘された(陈1999:131)。また、中国人の夫婦呼称の中で8割以上の男女がほぼ同じ割合で<名前類>[姓+名]の呼称を選び、使用する傾向が見られる(曹2003:48)。

本発表は近年の中国語の配偶者の呼称の使用実態を調査し、日本語との類似点と相違点を探ることを試みたものである。インターネットのアンケート専門サイト“问卷星”に「配偶者の呼称に関するアンケート」を作成し、調査を行った。調査地域は中国の都市部(北京、大連、上海、広州、深圳など)に限定した。また、子どもの有無が配偶者の呼称に影響を及ぼすため、調査対象は子どもをもつ既婚の中国人男女に限定した。2021年8月から2021年10月にかけて20代~50代を中心とした404名(男性200名、女性204名)の回答を得た。アンケート調査の結果は以下である。

1. 男性が配偶者を他人に紹介する場合、懇意の同僚に“老婆”が57%で最も多く使われており、続いて“爱人”(12%)となっている。親友に“老婆”(52%)、続いてフルネーム(10%)となっている。ところが、ビジネスの客に“老婆”(34%)、“爱人”(25%)、“太太”(14%)、“妻子”(11%)となっている。職場の上司に“老婆”(30%)、“爱人”(25%)、“太太”(14%)、“妻子”(14%)となっている。女性配偶者の呼称として“老婆”が最も多く使われているが、ビジネスなどのような公の場では中国人男性は“老婆”以外に、“爱人”や“太太”や“妻子”などを使い、時に場合に応じて使い分けることが分かった。
2. 女性が配偶者を他人に紹介する場合、懇意の同僚に“老公”が69%で最も多く使われており、続いてフルネーム(12%)となっている。親友に“老公”(57%)、続いてフルネーム(19%)となっている。ところが、ビジネスの客に“先生”(38%)が一番多く、続いて“老公”(37%)、

“爱人” (11%) となっている。上司に“老公”が42%で最も多く使われており、続いて“先生” (27%)、“爱人” (17%) となっている。男性配偶者の呼称として“老公”が最も多く使われているが、ビジネスなどのような公の場では中国人女性は“老公”以外に、“先生”や“爱人”などを使い、時に場合に応じて使い分けることが分かった。

3. 夫婦だけの場合、男性が配偶者を呼ぶ場合、1位が愛称 (34%) で、2位が“老婆” (33%) となっている。女性が配偶者を呼ぶ場合、1位が愛称 (30%) で、2位が“老公” (24%) となっている。夫婦だけの場合、男女ともに愛称で呼び合う実態が明らかになった。日本語の「子ども中心な用法」と異なることが分かった。
4. 女性が理想とする配偶者の呼称は1位が“老婆” (50%) で、2位が“太太” (20%) となっている。一方、男性が理想とする配偶者の呼称は1位が“老公” (55%) で、2位が“先生” (21%) となっている。配偶者の呼称について理想と使用実態の間に大きな違いは見られないが、“先生”と“太太”のような呼称は実は旧時代の呼称である。特に“太太”は旧時代使用人が女主人に対して用いた尊称であり、中国大陆では1949年新中国誕生から文化大革命 (1966年～1976年) 終了まで批判のことばとして用いられたので、タブーとされていた。しかし、現在では配偶者の呼称として復活しているように見える。

本調査により近年中国の都市部における配偶者呼称の使用傾向が明らかにされた。日本語の配偶者の呼称と対照した結果、両言語の間に大きな違いが見られた。

[引用文献]

- 金世朗 (2002) 「家族間の呼称表現における通時的研究」『現代社会文化研究』24, pp.269-286.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店, p.189.
- 文化庁 (1999) 『平成10年度国語に関する世論調査』大蔵省印刷局, pp.52-56.
- 水本光美 (2017) 「他人の配偶者の新呼称を探るアンケート調査」『日本語とジェンダー』17, pp.13-30.
- 曹偉琴 (2003) 「言語使用と社会的価値観」『社会言語科学』5 (2), pp.48-57.
- 陳建民 (1999) 《中国语言和中国社会》广东教育出版社, p.131.

贾彦德 (1999) 《汉语语义学》北京大学出版社. p.293. pp.317-318.

(にんり・東京農工大学准教授)